

SPAT がなければ私の接骨院は存在しなかった

『ゆがみ取り SPAT 下巻』が 2021 年 4 月に刊行され、2020 年 10 月発行の上巻と合わせて全体が完結した。開発の経緯については、先月のインタビュー記事（2021 年 4 月 7 日号・4 月 14 日号）をご一読願いたい。このシリーズでは、実際の臨床場面でゆがみ取り SPAT を早くから取り入れている何人かの治療家に登場してもらい、私と対談してもらうこととした。第 1 弾のお相手は、『ゆがみ取り SPAT』上下巻のビデオに出演した石川明人氏。ゆがみ取り SPAT を臨床応用している治療家の生の声を聴くことは、これからゆがみ取り SPAT を取り入れるかどうか検討している治療家にとって、とても参考になるはずだ。（鹿島田忠史）

石川明人（いしかわ・あきと）

1977 年 茨城県生まれ。

1997 年 埼玉県川口市 本間整骨院入職

2002 年 日本柔道整復専門学校卒業、同年柔道整復師免許取得

2003 年 埼玉県所沢市 新所沢整形外科内科勤務

2007 年 東京都墨田区 さくら針灸整骨院勤務

2009 年 千葉県船橋市に「あかり接骨院」開業。現在に至る

2013 年 SPAT UNION CLUB 認定指導講師就任



石川明人氏

鹿島田忠史（かしまだ・ただし）

1948 年東京生まれ。1973 年横浜国大工学部建築学科卒業。積水ハウスなどに 4 年間勤務。その後医療に転進し、1980 年あん摩マッサージ指圧師、翌年柔整師免許取得。直後 1 年間温古堂にて研修する。1989 年東邦大学医学部卒業、同年医師免許取得。1991 年操体法の理念を柱とする誠快醫院を開業し、以来 30 年間でがんなど難病を中心に診療している。著書に『がんを再発させない暮らし方』（主婦の友社）、『ゆがみ取り SPAT 上巻 総論・骨盤編』『ゆがみ取り SPAT 下巻 胸椎・頸椎編』（ともにヒューマンワールド）などがある。

鹿島田 石川先生には昨年初めのビデオ撮影で、本当にお世話になりました。改めてお礼を申し上げます。今日は、先生とゆがみ取り SPAT（以下 SPAT と略す）の関わりについて、いろいろとお話を伺いますので、よろしくお願いいたします。

石川 こちらこそ、ありがとうございました。よろしくお願いいたします。

柔整師の道を選んだきっかけは？

鹿島田 石川先生と SPAT の関わりを聞く前に、そもそものお話をお聞きします。先生が柔整師の道を選んだのはどんな理由だったのですか。何かきっかけがあったのですか。

石川 はい。私が、この道を選んだのは高校時代バスケットをしていて、怪我に悩まされたからです。田舎なので近くに治療院がなく、痛みを我慢しながらの部活動だったので、怪我の思い出が多く残っています。後輩の選手が青春時代を怪我で棒に振ってしまわないよう、きちんとケアしてくれる治療院があればと思いこの道を志しました。

SPATに対する最初の印象は「そんな一瞬で治るの??」

鹿島田 学生の時には本間整骨院の助手をされていたと以前聞きましたが、その時には腰痛や肩こりなどの慢性疾患にはどんな施術をメインにしていたのですか。

石川 本間整骨院では、基本的には昔ながらの“ほねつぎ”でしたので、包帯法や固定法などで施術していましたが、肩こりや慢性腰痛などは自費施術をしていました。私が入職したのが2月と寒い時期だったからなのか、「ぎっくり腰」が連日みえてました。仕事や家事ができないほどのぎっくり腰を早く治してあげたいと思っていました。この頃より“骨格のゆがみ”に対して意識し始めたように思います。

鹿島田 石川先生と初めて顔を合わせたのは、私が日本柔道整復専門学校で一般臨床医学を教えているときだと思うのですが、そうですね。

石川 はい。そうです。先生の授業は教科書をなぞるだけの国家試験対策の授業ではなかったですね。接骨院の現場でも多い内科疾患の関連痛による頸肩、背中、腰の痛みなどの講義をしてくれたので、面白くて一生懸命聞いていました。

鹿島田 確か最終講義の時に、少しだけSPATの話をしたと覚えているのですが。それが石川先生がSPATを知ったきっかけだったのですか。

石川 正直、SPATの話は記憶にはないのですが、「仙腸関節のゆがみが根本の原因」ということは覚えています。当時、本間整骨院ではぎっくり腰に仙腸関節の操作をして施術していたので、そのことについてはすごく記憶に残っています。

鹿島田 その後、私の開催する講習会に参加されましたが、その時のSPATに対する正直な印象はどうでした？

石川 ぶっちゃけ「そんな一瞬で治るの??」と思いました。鹿島田先生があまりにも簡単に手技をされていたので、そう感じたのだと思います。

鹿島田 当時、私は「SPATは簡単で、すぐにできるようになります」とっていた記憶があるのですが、実際に簡単だと思いませんでしたか。

石川 はい。先生は、簡単だから誰にでもできるとおっしゃっていました。見た目は簡単そうですが実際にやってみると…「ウソつけ!」と思いました(笑)。力加減、タイミングなど細かいところが特に難しかったですね。

実際、SPAT を臨床に取り入れてみると…

鹿島田 何回かの講習を受けて、ある程度SPATができるようになったはずですが、SPATを臨床に取り入れるのはスタッフとして難しかったですか。院長の方針もありますし…

石川 初めて臨床に取り入れたのは整形外科時代でした。症状の強い腰痛の方にカーテンに隠れてこっそり施術していました(笑)。院長も患者さんが良くなれば…と黙認してくれていた感じですね。

鹿島田 独立開業してからSPATを本格的に取り入れたようですが、それまでの施術との兼ね合いはどうしたのですか。SPATを取り入れようとするとき、どんな問題点がありましたか。困難があるので、SPATを取り入れるのは止めようと思ったことはありませんでしたか。すみません、一度にいろいろと聞いてしまって。

石川 いえ、大丈夫です。開業するときは「確かな技術と自費の柱になるものを取り入れよう」と思っていました。当初は患者さんも少なかったので、導入する問題点はなかったですね。導入をやめようとは思ったことも一度もありません。

鹿島田 SPATを初めて臨床で試したとき、石川先生の感想はどんな風だったのですか。また、患者さんの反応はどうでしたか。

石川 自分の技術の向上と比例して患者さんの満足度が上がっていったこと。そこが非常に嬉しかったですね。患者さんとしては、「矯正」と聞くとポキポキ鳴らすイメージがあったようでしたが、「ソフトな整体ですので安全ですよ」と言うと安心して受けてくれる感じでした。「無料でできます」と心理的なハードルを下げたのも受けてくれた要素だと思いますね。

鹿島田 SPATをしていて、してよかったと手応えを感じるのはどんなときですか。事例があったら教えてください。

石川 はい。当院の患者さんには脊柱管狭窄症でお困りの方が多いのですが、やはり、症状が改善して手術を回避できたことですね。「数回の施術で脚のしびれが取れた」「長時間立っていても痛くなくなったとか」。

あと、他院で良くならなかった症状がSPATでビフォーアフターで即座に変わる時の患者さんの反応が見ていて嬉しいですね。とにかく即効性があるのがいいんです。

SPAT は誰でもできる再現性のある施術法

鹿島田 SPATを臨床でしているとき、他の施術と比べてよかったと思える点は何でしょう。また、そう思えた症例がありましたら教えてください。

石川 はい。誰でもできる再現性のある施術法であることですね。誰でもゴッドハンドになれるというか。力の弱い女性でもできますし。慣れれば骨盤だけなら2～3分で終わるので、他の施術との組み合わせも時間を取られないのがいいところです。あとは、骨盤のゆがみが改善したら膝痛などの他所（よそ）の痛みが取れたりという例も多いです。

鹿島田 実際のSPATをするときに、難しく感じる点にはどんなものがありますか。それは、経験を積みれば解消できるものなのでしょうか。

石川 難しい点はシンクロ抵抗と追っかけ脱力ですかね。力加減とかタイミングとかはやはり練習が必要です。これに関しては経験を積んでいけば解消できますので大丈夫です。

鹿島田 最初に接したときと現在で、SPATの内容は違ってきてますか。違っているとして、どこがどれくらい違うようになったのでしょうか。

石川 基本的な技術には大きな変化はないですね。鹿島田先生ご自身が「後が気持ちいいは、体にいい」を常に探求されているので、細かいバージョンアップはあっても基本線は変わってないと思っています。

SPAT はコロナにも負けない自費施術の重要な武器になっている！

鹿島田 SPATは自費施術の武器になってほしいと思っているのですが、実際の臨床での手応えはいかがでしょう。もし、自費施術の武器にする上で注意点があるとすれば、どんな点でしょう。

石川 はい。当院ではSPATは重要な武器になっています。というか、SPATがなければ今頃あかり接骨院は存在していないじゃないかというくらいです。

患者さんが手術を勧められ「それ以外もう治療法がない」という追い込まれた中で、最後に私に頼ってください！ という心境になっています。こういう自信をつけてくれたのもSPATという確かな技術があるからだと思っています。どうしても必要な場合には、手術することを否定しませんが「ゆがみを取ってからでなければ手術しても意味がない」とさえ感じています。

注意点としては、盲目的に何でもSPATで治せる！ という自信過剰にならないことですかね。

鹿島田 なるほど。それは素晴らしいですね。今現在、世間では「コロナ禍」で様々な業種が苦戦を強いられていますが、先生の接骨院の方はいかがですか？

石川 はい。比較的高齢者の方が多いので、第一波の際は皆さん身構えていた感じはありました。しかし、今は「密を避ければ大丈夫」という認識が広がったので問題ないですね。それに、元々完全予約制の個室なのでほぼ影響はなかったです。お陰様で忙しく業務にあたっています。

操体理論による生活習慣指導は大事

鹿島田 それはすごいですね。コロナ禍でも右肩上がりですか。その秘訣は何だとお考えですか？
また、その現象には操体理論などがあてはまったりしていますか？

石川 はい。コロナコロナで怯えていても免疫力は上がりません。人混みを避ければ通院は可能ですし、ウォーキングなどの運動も同じです。操体理論の中身は生活習慣改善ですから、それを使って今までの生活を見直して高免疫力者になればウイルスにも強い体になります。骨格のゆがみを整えると症状が改善していく、日常生活が楽になる、自分のからだに自信がつく、というようないいスパイラルになっている。日々皆さんの顔を拝見しているとそんな感じがしています。

鹿島田 SPATでは手技以外に、操体理論による生活習慣指導を重視しています。患者さんに生活習慣指導をするとき、「余計なことを言わずに施術だけしてくれればいい」という顔をされませんか。また、そうした反応にあったとき、どのように対処して乗り越えました。あるいは、今でも困難を感じますか。

石川 はい、そうですね。当院は完全予約制で最初に電話などで問い合わせしてから来られるので、こちらの方で最初に取り捨選択できます。以前は「〇〇して」「痛い所は施術しないのですか？」と言われました。ところが、完全自費施術にして高額になると本気度の高い方が見えられるので、今はネガティブな意見はほとんどないので困難さとかストレスは感じてないです。

鹿島田 操体理論による生活習慣指導の有用性を感じることはありますか。それは、どんな場合でしょう。例があったら教えてください。

石川 はい。やはり慢性疾患を扱うときでしょうか。慢性疾患は加齢変化によることもありますが、健康意識の高い方が間違った習慣を身につけているのが原因のことも多いですね。今の高齢の方は我慢強いのはいいのですが、我慢しすぎて症状を悪化させてしまっている方も多い感じです。ストレスをストレスと感じていないような。そういった方には操体理論の根本である「後が気持ちいいは、体にいい」が響きます。「何かしているときに気持ちよく感じたり、行動した後の気持ちよさで、するかしないか決めてくださいね」と指導すると腑に落ちる方が多いです。

鹿島田 石川先生は、高齢者を対象とした健康教室の講師をされていますが、操体理論は役立っていますか。また、教室の受講者の反応はいかがです。

石川 はい。船橋市が中心となって開催される健康セミナーで、全てにおいて操体理論の肝（きも）である生活習慣改善をテーマにしています。夏ならば夏バテ予防。冬場ならばウィルス対策などですね。受講者の中には、病院に行って薬を飲むことが治療と勘違いしている方が多くいるので、自己治癒力を高めること、病気にならないための予防が一番大切なのに一番見逃されているといったお話をしています。他力ではなく自力で治しましょう！といった感じです。そして最後に講義を聞いていただいた方には「初回無料で施術します」と軽くアピールしてきます（笑）。すでに通っていただいている方もちらほらいますが、ありがたいことに講義が終わると2～3件の問い合わせが

ありますね。意識高い方が多く、3回目ともなると紙とペンを用意している人を見かけることもあり、ためになっているんだなあと嬉しくなります。

私が夢見ている SPAT の最終形は？

石川 最後に、私から鹿島田先生への質問があります。橋本敬三先生の操体法を鹿島田先生がアレンジしてSPATができました。そして私も光栄ながら今回先生の著書に関わることができました。ありがとうございました。鹿島田先生としましては、SPATが今後どのようなようになっていくことがお望みなのでしょうか？

鹿島田 そうですね。私が夢見ているSPATの最終形は、カイロプラクティックのように手技療法の一種として世の中に定着することです。どれとは言いませんが、一時ブームになった手技療法でも今は「聞いたことがないのですが、それって何ですか」となっているものもあります。ライフワークとして取り組んできたSPATがそうなるのは寂しいので、私が居なくなっても残るように残された時間で努力しようと思っています。

SPATに限らず、何かを定着させるには7つのステップが必要だと最近気づきました。それは、知る、理解する、納得する、試す、検証する、修正する、定着させる、の7つです。このステップのうち、どれか一つ欠けても定着しません。この対談記事を読んでいる人は、第一の知ることはクリアしているわけですね。コロナ禍で大変かもしれませんが、ゆがみ取りSPAT上下巻を購入して試し、最後のステップまでたどり着いてほしいと願っています。そうすれば、石川先生と同じように回復した患者さんの喜びの声を聞けるはずです。目の前で患者さんがよくなるのを見るのは本当に嬉しくて、心の中でやったーと叫びたくなります。

そして、さらに高度な技術を身につけたいと思う先生もいるでしょう。そんな人には、頸椎の矯正まで修得できる講習会があります。興味があったら、SPAT UNION CLUBのホームページを覗いてみてください。

今日はお忙しい中、対談に付き合ってもらって、ありがとうございました。

石川 こちらこそ、ありがとうございました。

週刊あはきワールド2021年5月5日号No. 712より許可を得て転載